

教育研究開発(FD)

－ 学生による授業評価アンケート 結果と授業改善 －

2020



東京成徳短期大学

2020年度 学生による授業評価アンケート 結果と授業改善

目 次

はじめに	3
【1】「学生による授業評価アンケート -より良い授業を目指して-」趣旨と目的 ...	4
【2】実施の方法	4
資料1「授業アンケートの依頼と実施方法」	5
資料2「授業アンケート用紙」	11
資料3「教員選択質問用紙」	13
【3】集計結果と考察・授業改善コメントの方法	15
(1) 学科全体の集計結果＜結果の表とグラフ＞	16
(2) 各科目の集計結果と考察・授業改善コメント	
＜各科目の結果の表・グラフと教員コメント＞	19
＜遠隔授業の課題－その対策と成果＞	148
【4】アンケート結果の分析と評価	158
おわりに	163
索 引	165

はじめに

この「学生による授業評価アンケート」は本年で 17 年目となる。この間数回の改編を重ね現在の学習成果を軸として授業効果の分析から、より良い授業への改善が見通せる形でのアンケートとした。このアンケートでは、学修の成果を確認し、その結果からより良い授業への示唆を得るべく、「学生満足度」を軸とするアンケートから、「学修成果（修得・向上できたもの）」を軸とするものへと改編を行った。また、集計時に学修成果に関する回答とその他の設問への回答との関連性を検討することによって、より良い授業（学修成果が上がる授業）への改善の方向性を明らかにすることを目指した。

更に科目ごとのねらいや工夫に沿った内容のアンケートを実施するための工夫として、「教員設定質問」を設けた。教員自らが質問項目を設定する仕組みを用い、自身の授業に関する効果的なアセスメント手法を検討することは、より良い授業を目指すために教員各自に求められる重要な一つの姿勢であると考えます。

このようにして積み重ねられてきた「授業評価アンケートーより良い授業を目指して」であるが、最も重要なのはその中で見えてきた改善の方向に対して、どう具体的変更を行い、その結果どのような効果を見出すことができたかである。今年はそうした結果のコメントも求め、改善の効果について情報を公開し共有することで、さらなる授業改良の方向を探るきっかけになることを期待したい。

【1】「学生による授業評価アンケート－より良い授業を目指して－」趣旨と目的
「東京成徳短期大学 学生による授業評価実施規程」より
(趣旨)

第1条 この規程は、東京成徳短期大学教育開発研究専門委員会規程第2条の規程に基づき、本学の教育開発研究活動等の一環として行う学生による授業評価（以下授業評価という。）の実施と運営について必要な事項を定める。

(授業評価の目的)

第2条 本学が開設する授業科目について学生による評価を行い、その結果を教員が共有し授業改善に役立てるとともに、ファカルティ・ディベロップメント活動を促進し、本学の教育開発研究活動を推進し、教育の質の向上に資することを目的とする。

【2】 実施の方法

新型コロナウイルス感染拡大によって、前期は全面オンラインの授業となった。そこで「授業評価アンケート－より良い授業を目指して－」では、どのような形でアンケートを行うか、検討を行い、結果として従来の対面授業との比較を行う上でもこれまで通りの形でのアンケートを行うこととした。このことによってオンライン授業によって授業、学習において変化したものがより明確化されるものとする。前期、後期それぞれ全授業においてアンケートを実施、通年科目については原則として後期に実施するものとした。

ただし今年度はオンライン授業の中でのアンケートということで、回答用紙を授業の中で配布するのではなく、ネット上での回答となる。いわゆるWEB回答の形式をとることとした。

アンケートの配布・回収は企画・IR室が行い、教員ごとに担当科目単位でアンケート依頼のデータを送り、それを各教員がオンライン授業の資料と同様学生に提示する仕組みとした。教員は指定の期間内(概ね授業終了までの1ヶ月間)にそれぞれの授業でアンケートを実施し、回答は学生がそれぞれWEB上で送信する形とした。回答はそのまま企画・IR室を経由してデータ処理業者に届き、各科目単位で集計された。

本アンケートは、選択回答と記述部分とからなり、質問には共通質問と各教員による設定質問とがある。学修成果に対する質問を設け、学生自身がその授業を履修することによって考え方や知識・技能といった学修成果がどの程度得られたかを自己評価させている。自由記述部分は授業構成要素(授業方法、進度、教科書・教材、板書・資料提示、学生への対応、環境・設備)について、評価する点、改善を求める点それぞれを学生に自由に記述させ、単なる感想ではなく、より良い授業につながる学生の声を求めるものとした。

全授業、全クラスでの実施を前提とすることから、学生への負担意識の軽減、惰性による作業的回答を避けるため、問題を極力厳選しアンケートの数を減らした。

今回はWEBアンケート形式を採用したことで、学生それぞれが自由な、都合の良い時間に回答できる形となり、より学生の自由意思が反映されるアンケートとなった。

資料1 「授業アンケートの依頼と実施方法」

短期大学 専任教員・非常勤講師 各位

東京成徳短期大学

学務部教育開発研究(FD)担当

学生授業評価アンケートの実施のお願い <前期科目>

2020 年度前期「授業アンケート<より良い授業を目指して>」を次の要領で実施いたします。

このアンケートは、本学の教育がどのように学生に理解され、どんな教育効果を生んでいるかを把握し、より良い授業に向けた教育開発研究を狙いとしたものです。また学生には、授業がどのような目的・ねらいに基づいて行われていたかを再確認させ、より高い学修成果を生むことを期待するものです。

教員・学生双方が授業アンケートのねらいを共有することと、教員は、その目標達成のためにどのような教授方法が効果的であるかを常に探求する姿勢を持つことが、より質の高い授業の実現につながるものと考えます。

本年度はオンラインでの授業となり、アンケート内容には従来継続のものと、変更したものがあります。アンケートの狙いをご理解いただき、何卒ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

【授業アンケートの内容】

『 授業アンケート — より良い授業を目指して 』

<共通質問>

問1：あなたはこの授業の目的を理解して受講したと思いますか。

(5 4 3 2 1)

問2：あなたはこの授業に対して真剣に取り組みましたか。(事前学習など自主的学習を含む)

(5 4 3 2 1)

問3：あなたはこの授業の内容を理解できたと思いますか。

(5 4 3 2 1)

問4：あなたがこの授業で修得・向上できたと思われるものを次の中から2つ以上選択してください。

(ア) 社会に生きる力、教養、美しい心

(イ) 教育・保育に関する専門的知識や技能

(ウ) 自分の得意分野の知識や技能

(エ) 教育・保育に関する研究意欲

(オ) 社会のニーズを理解した、教育・保育における実践力・即応力

(カ) 教育・保育に関する社会的な責任感や倫理観

(キ) 保育の専門家に求められる役割を理解し行動する力

問5：この授業について、オンライン授業、授業進度、教科書・教材・資料、話し方、学生への対応などで、良かった点を書いてください。(自由記述)

問6：この授業について、オンライン授業、授業進度、教科書・教材・資料、話し方、学生への対応などで、改善してほしい点があれば具体的に書いてください。（自由記述）

問7：この授業を履修して、その専門分野での考え方や知識、技能が身につきましたか。

(5 4 3 2 1)

<教員設定質問>

問8：「設問は教員指示」

(5：そう思う 4：ややそう思う 3：どちらともいえない 2：あまり思わない 1：そう思わない)

【実施方法】

今回の授業アンケートはwebにて実施します。ご担当の科目ごとにURLが設定されています。各授業内でURLと教員設定質問を学生にご案内ください。回答率のためにも授業内での回答が奨励されていますのでご協力ください。

① 添付の「学生の皆さんへ 授業アンケート回答のお願い」（科目数分あり）を学生に通知し、そこから回答するよう指示をお願いします。

学生への通知

「問8 教員設定質問」を「学生の皆さんへ 授業アンケート回答のお願い」に記入し、学生に提示してください。

② 問8「教員設定質問」について、各教員はそれぞれの授業で特に学生に問いかけたい内容の質問を設定してください。回答選択肢の変更が必要な場合はその設定もお願いします。

ただし、(5：そう思う 4：ややそう思う 3：どちらともいえない 2：あまり思わない 1：そう思わない) がweb上表記されていますので変更後の選択肢を学生に確実に通知をお願いします。

教員設定質問の報告のお願い

教員設定質問・回答選択肢を記入し学生に通知した「学生の皆さんへ 授業アンケート回答のお願い」を、企画・IR室 (ir@tsu.ac.jp) まで返送ください。

③ 回答率を高めるために、できるだけ授業時間での回答を学生に奨励してください。(回答は授業時間外でも可能です)

④ 自由記述では授業改善の方向性が読み取れる情報となりますので、できるだけ記述するよう声かけをお願いします。

【実施期間】 7月13日(月)から8月8日(月)

授業計画との関係で適当な日をお選びください。尚、アンケートの回収率が高くなるよう、できるだけ授業時間に回答できるようご配慮をお願いします。(回答は授業時間外でも可能です)

授業アンケート集計結果は9月中旬頃にお届けいたします。その後、授業に関するPDCAの一環として、それぞれの担当授業のアンケート結果を考察の上、『評価と授業改善について』のコメントのご提出をお願いいたします。

学生の皆さんへ

授業アンケートへの回答のお願い

本学では「より良い授業を目指して」授業に関するアンケートを実施しています。授業を通して学んだこと、理解したこと、また授業に望むことなど、授業に関するアンケートへの回答をお願い致します。

東京成徳短期大学ではアンケートの回答をもとに、より質の高い授業を目指して授業の改善を進めていきたいと考えています。

尚、回答は個人が特定されない形で集計されます。回答内容が成績に影響することはありません。今回は web でのアンケートになります。

①この授業の授業アンケート URL にアクセスして回答に入ってください

科目名	〇〇概論
曜日	月曜日 1 限 月曜日 2 限
教員	成徳 太郎
URL	http://*****

②教員設定質問について

問8の「教員設定質問」について授業内で指示されます。

指示された教員設定質問の質問文を解答欄に記入してください。

<教員設定質問>

問9においてその回答をしてください。

標準回答選択肢(web 画面に表示されています。)

5： と思う 4： ややと思う 3： どちらともいえない 2： あまり思わない 1： そう思わない

他の回答選択肢(設問の必要に応じて)

5： 4： 3： 2： 1：

アンケートの回答期間は7月 13 日(月)～8 月 8 日(土)です。授業時間外での回答も可能ですが、できるだけ授業時間内に回答をお願いします。

短期大学 専任教員・非常勤講師 各位

東京成徳短期大学

学務部教育開発研究(FD)担当・企画 IR 室

学生授業評価アンケートの実施のお願い <後期科目>

2020 年度後期「授業アンケート<より良い授業を目指して>」を次の要領で実施いたします。

このアンケートは、本学の教育がどのように学生に理解され、どのような教育効果を生んでいるかを把握し、より良い授業に向けた教育開発研究を狙いとしたものです。また学生には、授業がどのような目的・ねらいに基づいて行われていたかを再確認させ、より高い学修成果を生むことを期待するものです。

教員・学生双方が授業アンケートのねらいを共有することと、教員は、その目標達成のためにどのような教授方法が効果的であるかを常に探求する姿勢を持つことが、より質の高い授業の実現につながるものと考えます。

後期はオンライン授業と一部対面授業となり、アンケート内容としては従来継続のものと、変更したものとがあります。アンケートの狙いをご理解いただき、何卒ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

【授業アンケートの内容】

『 授業アンケート — より良い授業を目指して 』

<共通質問>

問1：あなたはこの授業の目的を理解して受講したと思いますか。

(5 4 3 2 1)

問2：あなたはこの授業に対して真剣に取り組みましたか。(事前学習など自主的学習を含む)

(5 4 3 2 1)

問3：あなたはこの授業の内容を理解できたと思いますか。

(5 4 3 2 1)

問4：あなたがこの授業で修得・向上できたと思われるものを次の中から2つ以上選択してください。

(ア) 社会に生きる力、教養、美しい心

(イ) 教育・保育に関する専門的知識や技能

(ウ) 自分の得意分野の知識や技能

(エ) 教育・保育に関する研究意欲

(オ) 社会のニーズを理解した、教育・保育における実践力・即応力

(カ) 教育・保育に関する社会的な責任感や倫理観

(キ) 保育の専門家に求められる役割を理解し行動する力

問5：この授業について、オンライン授業、授業進度、教科書・教材・資料、話し方、学生への対応などで、良かった点を書いてください。(自由記述)

問6：この授業について、オンライン授業、授業進度、教科書・教材・資料、話し方、学生への対応などで、改善してほしい点があれば具体的に書いてください。(自由記述)

問7：この授業を履修して、その専門分野での考え方や知識、技能が身につきましたか。

(5 4 3 2 1)

<教員設定質問>

問8：「設問は教員指示」

(5：そう思う 4：ややそう思う 3：どちらともいえない 2：あまり思わない 1：そう思わない)

【実施方法】

今回の授業アンケートはwebにて実施します。ご担当の科目ごとにURLが設定されています。各授業内でURLと教員設定質問を学生にご案内ください。回答率のためにも授業内での回答が奨励されていますのでご協力ください。

① 添付の「学生の皆さんへ 授業アンケート回答のお願い」（科目数分あり）を学生に通知し、そこから回答するよう指示をお願いします。

学生への通知

「問8 教員設定質問」を「学生の皆さんへ 授業アンケート回答のお願い」に記入し、学生に提示してください。

② 問8「教員設定質問」について、各教員はそれぞれの授業で特に学生に問いかけたい内容の質問を設定してください。回答選択肢の変更が必要な場合はその設定もお願いします。

ただし、(5：そう思う 4：ややそう思う 3：どちらともいえない 2：あまり思わない 1：そう思わない)がweb上表記されていますので変更後の選択肢を学生に確実に通知をお願いします。

教員設定質問の報告のお願い

教員設定質問・回答選択肢を記入し学生に通知した「学生の皆さんへ 授業アンケート回答のお願い」を、企画・IR室 (ir@tsu.ac.jp) まで返送ください。

③ 回答率を高めるために、できるだけ授業時間での回答を学生に奨励してください。(回答は授業時間外でも可能です)

④ 自由記述では授業改善の方向性が読み取れる情報となりますので、できるだけ記述するよう声かけをお願いします。

【実施期間】 12月21日(月)から1月23日(土)

授業計画との関係で適当な日をお選びください。尚、アンケートの回収率が高くなるよう、できるだけ授業時間に回答できるようご配慮をお願いします。(回答は授業時間外でも可能です)

授業アンケート集計結果は2月中旬頃にお届けいたします。その後、授業に関するPDCAの一環として、それぞれの担当授業のアンケート結果を考察の上、『評価と授業改善について』のコメントのご提出をお願いいたします。

学生の皆さんへ

授業アンケートへの回答のお願い

本学では「より良い授業を目指して」授業に関するアンケートを実施しています。授業を通して学んだこと、理解したこと、また授業に望むことなど、授業に関するアンケートへの回答をお願い致します。

東京成徳短期大学ではアンケートの回答をもとに、より質の高い授業を目指して授業の改善を進めていきたいと考えています。

尚、回答は個人が特定されない形で集計されます。回答内容が成績に影響することはありません。今回は web でのアンケートになります。

①この授業の授業アンケート URL にアクセスして回答に入ってください

回答は1科目につき1人1回限りです。

科目名	〇〇概論
曜日	月曜日 1 限 月曜日 2 限
教員	成徳 太郎
URL	http://*****

②教員設定質問について

問8の「教員設定質問」について授業内で指示されます。

※ 次の教員設定質問をアンケートの解答欄に転記・記入してください。

<教員設定質問>

問9においてその回答をしてください。

標準回答選択肢(web 画面に表示されています。)

5： そう思う 4： ややそう思う 3： どちらともいえない 2： あまり思わない 1： そう思わない

他の回答選択肢(教員設定質問の必要に応じて)

5： 4： 3： 2： 1：

アンケートの回答期間は 12 月 21 日(月)～1 月 23 日(土)です。授業時間外での回答も可能ですが、できるだけ授業時間内に回答をお願いします。

資料2 「集計結果の通知及びコメント・授業改善結果の依頼」

教 員 各 位

2020 年 10 月 1 日

東京成徳短期大学
学務部 教育開発研究(FD)担当

授業アンケート集計結果の通知及びコメント・授業改善結果について(依頼)

2020 年度前期「授業アンケート集計結果」をお届けいたします。

このアンケートは、より高い学習成果を目指して、授業の構成要素が学生にどのように評価され、効果を生んでいるかを検証し、またそれぞれの教員がどのような方針で授業を行い、その効果をどう確認することができたかを、担当教員の設定質問から明らかにして、より良い授業に向けた改善方法の一端を探ることを狙いとするものです。

アンケート結果の集計方法としては、学生の知識・技能の修得度(学びの成果)と、授業構成要素の評価、教員設定質問の回答とを相関させ、教育開発研究・授業改善に役立つ情報となるよう、クロスでの集計を行いました。どのような授業方法が、より高い学びの成果を上げることができるか、成果を感じている学生はどのような授業要素を評価し、成果を感じない学生は何の評価が低いのか、自由記述(効果を感じた授業方法、改善を望む点)に関しても、学びの成果別に集約し、考察頂ければと思います。

こうした集計の結果から、教育開発研究・教育改善がどのように行われ、どんな成果を上げることができたか、分析考察の結果をご提出頂きたいと思います。ここでのコメントを集約公表し、一人ひとりの取り組みを参考にそれぞれが教育開発研究・授業改善を進め、東京成徳短期大学全体で、より魅力ある質の高い授業を目指したいと思います。

コメントは下記の要領で企画・IR 室(ir@tsu.ac.jp)宛にメールでお送りください。

皆さまの御理解と御協力、どうぞよろしくお願い申し上げます。

記

■提出先

東京成徳短期大学 企画・IR 室(担当:内田)

E-mail. ir@tsu.ac.jp

TEL. 03-3908-4563 / FAX. 03-3907-6195

■提出期限

2020 年 10 月 28 日(水)

■記入様式

・科目コード(授業番号) 0000000 半角数字

・担当教員名 000 00(フルネーム)

・授業科目名 0000000

・コメント

① アンケート結果(教員設定質問も含め)についてのコメント <300字程度>

② 授業改善とその結果についてのコメント <300字程度>

※ メールによるテキストまたはワードファイルでの提出にご協力ください

※ メール件名およびワードファイルのタイトルは「〇〇△△(教員姓名) 授業アンケートコメント」としてください。

※ 複数の授業を担当されている場合は、一つのワードファイル(もしくはメール)の中に、複数のコメントを記入して下さい。科目ごとに別々のファイル(メール)に分けないようお願いします。

東京成徳短期大学

学務部教育開発研究(FD)担当・企画 IR 室

「授業アンケート—より良い授業を目指して」

集計結果の通知及び、結果のコメント・授業改善成果について (依頼)

2020年度後期「授業アンケート集計結果」をお届けいたします。新型コロナウイルス感染症拡大の中で、大学での対面授業と遠隔授業とがミックスされた、大変困難な授業運営となり、ご対応いただきましたこと本当にありがとうございました。さらにその中で「授業アンケート—より良い授業を目指して」にご協力いただきましたこと、お礼申し上げます。

このアンケートは、より高い学習成果を目指して、授業の構成要素が学生にどのように評価され、効果を生んでいるかを検証し、またそれぞれの教員がどのような方針で授業を行い、その効果を確認することができたかを、担当教員の設定質問から明らかにしながら、より良い授業に向けた改善方法の一端を探ることを狙いとするものです。

アンケート結果の集計方法としては、学生の知識・技能の修得度(学びの成果)と、授業構成要素の評価、そして教員設定質問の回答とを相関させ、クロスでの集計を行いました。どのような授業方法が、より高い学びの成果を上げることができるか、学習成果を感じている学生はどのような授業要素を評価し、成果を感じない学生は何の評価が低いのか、自由記述に関しても学びの成果別に考察頂ければと思います。コメントを「1-①授業アンケート結果について」にお書き下さい。

また、継続的に同じ科目(または同等の科目)をご担当の先生は、過去の結果に対する本年度の改善成果について「1-②授業改善とその成果」にコメントいただきますようお願い致します。

更に今年度は新型コロナウイルス感染拡大により、遠隔授業を中心に(一部対面授業)講義・授業を実施して参りました。このことによる授業への影響と対策・その結果について、アンケート結果(自由記述等)から読み取れるものがあれば「2. 遠隔授業の課題—その対策と成果」にお書きください。

ここでのコメントを集約し、それぞれの取り組みでどんな成果を上げることができたか、考察の結果を公表し、それらを参考に東京成徳短期大学全体で教育開発研究・授業改善を進め、より魅力ある質の高い授業を目指したいと思います。

コメントは下記の要領で企画・IR 室(ir@tsu.ac.jp)宛にメールでお送りください。

皆さまの御理解と御協力、どうぞよろしくお願い申し上げます。

記

■提出先 東京成徳短期大学 企画・IR 室(担当:内田)

E-mail. ir@tsu.ac.jp

TEL. 03-3908-4563 / FAX. 03-3907-6195

■提出期限 2021年2月27日(土)

■記入様式

・科目コード(授業番号) 0000000 半角数字

・担当教員名 000 00(フルネーム)

・授業科目名 0000000

・コメント

1-① アンケート結果(教員設定質問も含め)について <300 字程度>

-② 授業改善とその成果について <300 字程度>

2- 遠隔授業の課題—その対策と成果 <500 字程度まで>

※ メールによるテキストまたはワードファイルでの提出にご協力ください

※ メール件名およびワードファイルのタイトルは「〇〇△△(教員氏名) 授業アンケートコメント」としてください。

※ 複数の授業を担当されている場合は、一つのファイルに、複数のコメントを記入して下さい。

資料3 「web 回答画面」

設問 1

単一選択 必須

あなたはこの授業の目的を理解して受講したと思いますか。

☐ 5 そう思う
☐ 4 ややそう思う
☐ 3 どちらとも言えない
☐ 2 あまりそう思わない
☐ 1 そう思わない

設問 2

単一選択 必須

あなたはこの授業に対して真剣に取り組みましたか。（事前学習など自主的学習を含む）

☐ 5 真剣だった
☐ 4 わりと真剣だった
☐ 3 どちらとも言えない
☐ 2 あまり真剣ではなかった
☐ 1 真剣ではなかった

設問 3

単一選択 必須

あなたはこの授業の内容を理解できたと思いますか。

☐ 5 理解できた
☐ 4 わりと理解できた
☐ 3 どちらとも言えない
☐ 2 あまり理解できなかった
☐ 1 理解できなかった

設問 4

複数選択 必須 1-7 頻選択

あなたがこの授業で修得・向上できたと思われるものを次の中から2つ以上選択してください。

☐ (ア) 社会に生きる力、教養、美しい心
☐ (イ) 教育・保育に関する専門的知識や技能
☐ (ウ) 自分の得意分野の知識や技能
☐ (エ) 教育・保育に関する研究意欲
☐ (オ) 社会のニーズを理解した、教育・保育における実践力・即応力
☐ (カ) 教育・保育に関する社会的な責任感や倫理観
☐ (キ) 保育の専門家に求められる役割を理解し行動する力

設問 5

自由記述 1-400文字入力

この授業について、オンライン授業、授業進度、教科書・教材・資料、話し方、学生への対応、などで、良かった点を書いてください。（自由記述）

0 / 400 文字

設問 6

自由記述 1-400文字入力

この授業について、オンライン授業、授業進度、教科書・教材・資料、話し方、学生への対応、などで、改善してほしい点があれば具体的に書いてください。（自由記述）

0 / 400 文字

設問 7

単一選択 必須

この授業を履修して、その専門分野での考え方や知識、技能が身につきましたか。

- ☐ 5 身についた
- ☐ 4 わりと身についた
- ☐ 3 どちらとも言えない
- ☐ 2 あまり身につかなかった
- ☐ 1 身につかなかった

設問 8

自由記述 1,400文字入力

【教員設定質問】の質問を記述してください。

0 / 400 文字

設問 9

単一選択

【教員設定質問】の質問に対する回答を次の中から選択してください。

- ☐ 5 そう思う
- ☐ 4 ややそう思う
- ☐ 3 どちらとも言えない
- ☐ 2 あまりそう思わない
- ☐ 1 そう思わない

アンケートに回答する

【3】 結果の集計と考察・授業改善コメントの方法

集計されたアンケート結果は、各教員に通知され、その結果から読み取った内容と授業改善についてのコメントを作成する。アンケートの結果の集計に際しては、学習成果の高低（「5」の回答と「4」の回答、「3 2 1」の回答）と授業要素「授業目的の理解」「学習の意欲・姿勢」「授業内容の理解」とをクロスでグラフ集計し、その相関から、学習成果をあげる授業要素について考察できる形としている。また、自由記述に関しても、評価できる点、改善を求める点について、学生の学習成果との関連で読み解くことができ、学習成果の評価が低い学生は、どのような改善点を求めているか、そのことによって一つの授業改善の方向が見通せるものと考えている。

また今年度後期については、これまでの授業改善の結果として効果が認められた点のコメントの記載を依頼した。授業アンケートの結果のコメントと授業改善について、経年実施の成果として認められるものがあれば、そこについて公表・情報共有し、お互いの授業改善に向けた一つの動きになることを期待したい。

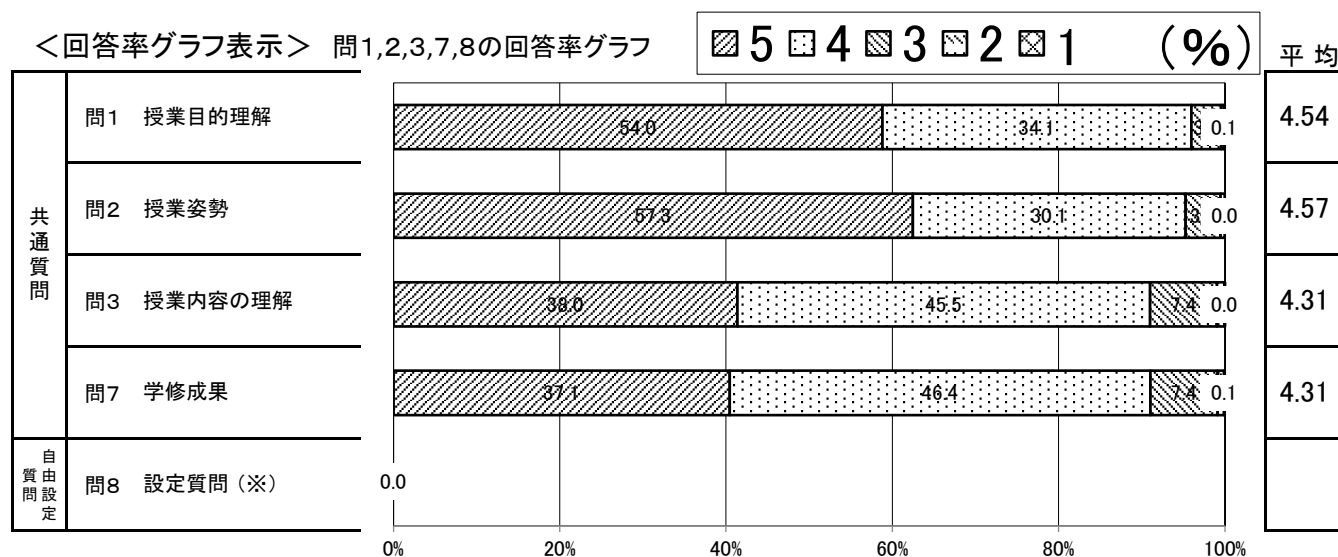
(1) 学科全体の集計結果

＜結果の表とグラフ＞

科目コード: _____
 授業科目名: 全体 _____
 担当教員名: _____

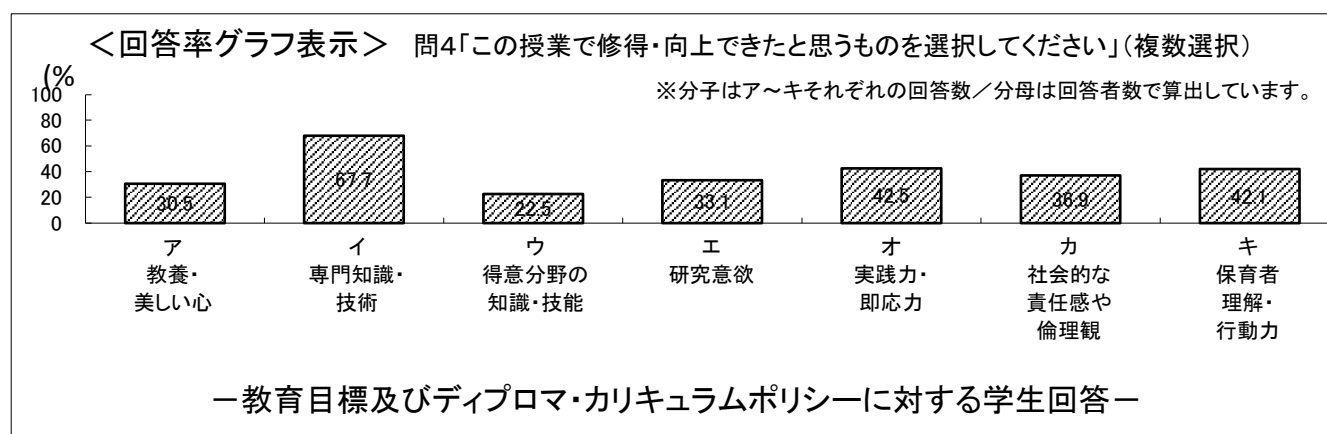
2020年度 前期
 履修者数: 4621 名
 回答者数: 3020 名

<回答率グラフ表示> 問1,2,3,7,8の回答率グラフ



※ 設定質問なし

問5・問6(自由記述)「オンライン授業・教材資料提示・学生対応等について」は別記配布



《担当教員のコメント》

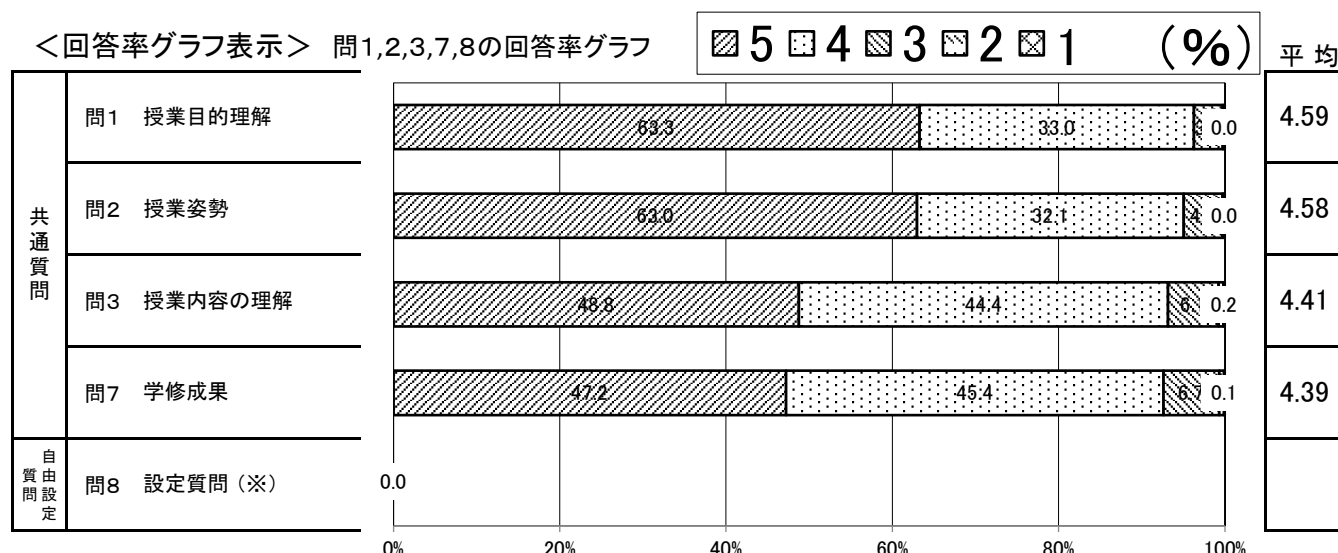
【授業アンケート結果(問7学修成果とのクロス集計、教員設定質問を含め)へのコメント】

【授業改善—授業アンケートを受けて】

科目コード: _____
 授業科目名: 全体
 担当教員名: _____

2020年度 後期
 履修者数: 5715 名
 回答者数: 2405 名

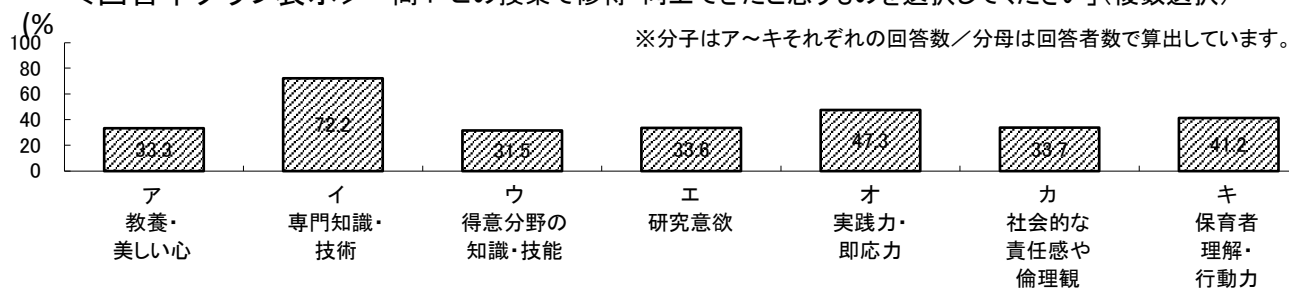
<回答率グラフ表示> 問1,2,3,7,8の回答率グラフ



※ 設定質問なし

問5・問6(自由記述)「オンライン授業・教材資料提示・学生対応等について」は別記配布

<回答率グラフ表示> 問4「この授業で修得・向上できたと思うものを選択してください」(複数選択)



—教育目標及びディプロマ・カリキュラムポリシーに対する学生回答—

《担当教員のコメント》

【授業アンケート結果(問7学修成果とのクロス集計、教員設定質問を含め)へのコメント】

【授業改善—授業アンケートを受けて】

(2) 各科目の集計結果と考察・授業改善コメント

<各科目の結果の表・グラフと教員コメント>

(2) 各科目の集計結果と考察・授業改善コメント

＜遠隔授業の課題－その対策と成果＞

石川 雅俊:日本国憲法

2020年度は専らオンライン授業であったが、オンライン授業に関する学生から意見はおおむね好意的であった。ただ、「質問がしづらい。」「質問の回答を共有して欲しい。」という意見もあった。次年度オンライン授業が継続される可能性もあるので、どのようにして質問しやすい雰囲気を作るか等の対策を考えていきたいと思う。

磯部 知愛:子どもの保健

遠隔授業を中心に(一部対面授業)講義・授業授業への影響と対策・その結果について、アンケート結果(自由記述等)から読み取れるものがあれば上記1にも記載した通り、コロナ渦が継続の有無に関わらず、オンライン配信や、学生、教員ともにITリテラシーの向上を目指すべく時代にて、対面授業と遠隔のハイブリッド時の対応も鑑み、大学側の機材やwifi環境などの改善が必要かと思われる。もちろん、昨年度から考えれば、ものすごいスピードで大学側も、教員も、学生もITリテラシーが向上したと高く評価できる1年であったのではないかと感じております。

糸山 昌己:課題研究A

1年生ということで、例年なら調査・研究をグループで行なっていたが、遠隔授業が中心ということで個人での調査・研究を行なった。1年後期でまだ個人差があるのでグループでの活動が望ましいことは変わらないので、遠隔授業での方法を検討したいと思う。

糸山 昌己:教職実践演習(幼稚園・保育所)

演習形式の授業であるので、遠隔授業がメインの授業形態だとやりにくさを学生・教員ともに感じた。

糸山 昌己:保育者の言語表現

例年は、内容の密度が濃いものがほとんどであったが、90分という授業では人数的にも少し余裕が無かったが、本年度は受講学生の人数が減ったため、一人一人に向けられる時間を増やすことができた。

糸山 昌己:外国語コミュニケーション(英語)

遠隔授業においてもほぼ対面授業時と同じ内容と方法で実践できた。ただ、例年だと映画を活用した授業ができていたが、遠隔授業では映画の活用が技術的な面からも難しかった。来年度は対面授業が基本なので、例年通りの授業テウ展開ができるのを期待している。また、遠隔授業でも映画の活用が本年以上にできるように対策・研究を行いたい。

岩崎 朋枝:子どもの食と栄養

遠隔授業が開始した当初、Teamsの「課題」からレポート等を提示すると、見られない学生が一部いると聞いていたため、投稿欄にFormsのリンクを張り付けてレポートを課していた。今回のアンケートで、他の先生が「課題」から出してほしいという要望があり、次年度は要望に応じて変更する予定である。学生が教員からの情報を受け取りやすいように、学内でのTeamsの統一した使い方がないと良いと感じた。学生と違い、教員の方が他の先生がどのようにTeamsの運営をしているのか分からず、統一した方が学生にとってわかりやすい事柄が潜在している可能性があるように思えた。

岩久 由香:子どもの健康と安全

オンデマンドにおける演習授業での技術の習得をどのような方法で行うか、また学生の習熟度合いをどのように測るかが課題であった。対策として、対面授業時に集中的に実技演習や、ビデオ視聴、講師の体験的なエピソードを盛り込んだ授業内容とし、オンデマンドの教材は全て音声付き、或いは動画視聴等により、できるだけ具体的な理解につながるよう配慮した。また資料は動画とPDFの両方を用意したが、学生にとっては学習や理解のしやすさに結びついたことがアンケートの自由記述から読み取れた。また、学生の習熟度を測るために各回の授業で演習問題や課題の配信を行った。オンデマンドではいずれも個人の作業にはなるが、それらの解説と学生からの質問に対する回答は授業内で行い、クラス全体で情報を共有し、学びを深められるように留意した。また、個人的な質問等に対するフォローはチャットが非常に有効であった。とりわけ非常勤講師の場合や今回のような状況下における遠隔授業時においては、双方向で常に連絡が取れるということは今までにないメリットといえる。その他、教材の録音、配信、受信等について個々の機材等により、音声や動画が視聴出来ないケースがあったため、今後は教材の作成、配信、受信側の環境の安定化など改善が必要と思われた。

大國 ゆきの:課題研究A

4週のうち3週が Teamsの会議機能を使ったオンラインのリアルタイムという形式で、学生同士の交流はまだ萌芽期である。自分が発表するときだけはマイクだけでなくカメラもオンにしてみようかと促したが、週を追うごとに「顔出しはなしでお願いします」という学生が増え、後半はほとんど誰も顔を出さなかった。それでも「他の学生の話が聞くことができ面白い」「1人ずつ先生と会話ができ、ゼミ以外の悩みや質問なども真摯に聞いて下さりとても良かったです」「学生の意見に真摯に答えてくださった」「オンラインでゼミのみんなと顔を合わせることで、課題や不安なことがあっても みんな一緒だと自分を立て直すことができました」「オンライン上での他の学生との状況や進み具合などの把握ができて良かったと思いました」といった声が挙げられたことは成果にあたるかもしれない。少しずつではあるが、互いの研究テーマを理解し、助け合おうとする姿勢が見えつつある。次年度の課題研究Bで、対面授業が主となってからの関係の深化を楽しみにしている。

大國 ゆきの:心理学

4週のうち1週は対面で、残り3週が Teamsの会議機能を使ったオンラインのリアルタイムという形式で、教科書とPowerPoint資料を使った講義を行った。開講時に確認したところ、すべての学生が内容に興味を持って選択したわけではないと答え、受講理由は「他の卒業選択必修科目をとりたくなかった」「他の卒業選択必修科目を履修したものの単位が得られなかった」「時間割で選んだ」というものであった。実際に授業を進めていく中でも、通信環境下にあるはずなのだが問いかけても返事がない学生が多く、課題にも見当違いの内容が多くみられた。対面授業でも寝てしまう学生がいるが、同じような状況であったことが想定される。それでもコメントに良かった点として「人数も多くなかったので一つ一つわかり やすく説明してくれたところ」と書いてくれた学生がいたことと、改善要求がなかったことが救いである。

大國 ゆきの:子ども家庭支援の心理学

4週のうち3週は教科書と Teamsに提示される授業資料を用いて自分のノートを作成しながら学んだ後 Moodle (Teamsにはない多様な設問形式が可能) で小テスト等に答え、教員のコメントを待つ、というスタイルで授業を進めた。リアルタイム型を選択しなかった理由は、通信環境に問題があると訴える学生がいたことと、理解やノート作成に必要な時間に個人差があり、マイペースで学習する方が消化不良を起こしにくいと考えたためである。結論として、この選択は学修成果を高めたと考えられる。学生からのコメントにも「資料と教科書の両方があり、理解しやすかった点と、課題が総まとめのようになっていて理解を深めていた点です」「オンデマンド式だったので、自分のペースで学習することができた点」「授業資料のパワーポイントがとても見やすかった」「moodleが良かった」「テスト形式の課題がとても勉強になりました」「課題に対して評価、コメントをくださるのが嬉しかったです。とてもやる気が出 ました!!」等、多数が挙げられ、報われた思いがする。

一方で、すべての課題をTeams提出にしてほしいという内容が「改善してほしい点」として複数挙げられた。Formsが 学習内容に適した多様な問題設定ができるよう改善されることを切に望む。

大澤 洋美:課題研究A

- ・オンラインのノート活用で、学びの履歴を確認でき、課題研究のステップを作ることが出来た。
- ・オンライン・対面等の状況に合わせて工夫をして、学生の学びへの意欲に寄り添うことが出来るようにしていきたい。

大澤 洋美:保育者の言語表現

- ・オンラインと対面のハイブリットによる授業だからこそできる映像による授業や教材の提示と課題のバランスが学びへの意欲を高めたのではないかなとも思う。

大澤 洋美:保育指導法演習

- ・今年度はオンライン授業が中心であったが、その特徴を生かし、教科書の読み込みから保育への深い理解を求めたことで、保育実践においても専門性を深めることが実感できたのではないかなと思う。
- ・オンライン授業では特に資料をシンプルにして、学生の取り組み時間に配慮してことが授業の理解や意欲につながった。また、学生の学び方を想像しながら、意欲をもつことが出来るようにアプローチすることの大切さを感じることが出来た。

木田 マリ:子どもの食と栄養

前期はオンデマンド形式で授業を行いました。授業内容を事前に精査し、計画的に進めることができたのは良かった点です。適切な資料や確認問題などを作成してわかりやすさにこだわりましたが、どうしても一方的で、盛りだくさんの内容になってしまったのが反省点です。

後期になり、対面とオンラインの併用になってからは、学生の理解度や関心の高さに応じたメリハリのある授業が実施出来たと感じています。

教員として負担に感じたのは、授業回ごとに確認テストや課題を出していたので、それに対する評価やコメント、フィードバックをすることがオンラインという不慣れな状況で時間をとられ過ぎました。

郡司 敦:課題研究A

後期の授業の設定上、1, 2, 3回が遠隔授業で4回目が対面授業になった。15回の授業の中に、4回1セット×4か月という流れがあった。月1回の対面授業は全員で会うからできるグループごとの表現活動の発表の練習を中心にした。月3回の遠隔授業は対面授業に向けてモチベーション的にも、实际的にも準備を行った。自由記述のコメントを読むと「限られた対面を有効に使ってきちんと発表まで持って行けた。」「オンラインが多い中でもグループでの発表に向けてスムーズに進められた。」という良い点が示された。半面、「自分の好きなことやグループを一番最初に選びたかった。」という改善してほしい点が示された。事前アンケートから学生の好きな事を推察してグループ分けを行ったが、学生は自分が選んだという感覚がほしかったのだと思う。ただ、その自由を全員の学生に与えた時にグループの人数を整えるための時間がかかり、授業計画に成立しない部分が出てくる恐れがあった。授業を成立させる事を優先すると漏れてしまう学生の要望があり、できるだけ両立する工夫が必要だと考えた。

郡司 敦:音楽表現A

オンライン授業では主にピアノレッスンとスリーコードの理論と実践を行い、対面授業では音楽研究発表会に向けてグループアンサンブルの練習を行った。学生からのコメントに「音楽理論の解説が毎回分かりやすかったです。」「音楽理論では、記述式のプリントがあってもよかったかと思いますが。アンサンブルの特別レッスンなどをオンラインで行ったほうがよかったと思います。」とありました。音楽理論は動画解説とpptの資料を用意し、formsでの課題提出を行った。記述式のプリントを行うと学生の負担が増えると思ったのでformsでの課題提出にしたが、学生によってはプリントにして、分かり易く明示した方がよかったかもしれない。オンラインでの資料の明示の仕方をよく選ぶ必要があると考えた。

郡司 敦:音楽表現B

学生からの良かった点のコメントで「ピアノが大学になって始めたため、まだまだ不安が沢山ありましたが、オンラインだったけど授業を受けて少しずつリズムや音符の読み方も分かるようになり、1番成長ができたと思う教科だと感じています。」とあり、遠隔授業でピアノのレッスンをする方法や学生の成長、モチベーションは確認できた。一方、改善してほしい点のコメントで「実習で発表に出れない生徒への対応が雑で私の場合、出なかったのに出なかったのでも悲しかったです。」とあり、実習の時期が学生によって異なっていたため、対面授業の日数が少ない事も相まって、何人かの学生が発表に参加できなかった。この点はフォローができなかったのもので、今後の反省点として、対策を考えていきたい。

小泉 左江子:在宅保育

今年は全く予定していなかった遠隔授業になり、いろいろと戸惑いがあった。
①視聴覚教材の活用について。特に最初の授業でベビーシッターの仕事のDVDが見られないのは、今後の授業の内容理解に関わるので、販売元にかけあってDVDの動画を見られるようにした。また毎回見ていたまとめの動画は、残念だったが仕方なく必要最小限対面授業の日に見せた。やはりイメージしやすいと好評だった。
②毎回の授業について。授業のポイントをPPTで確認し、テキストを読んで課題を提出する形は、各自のペースで学べるとか、何回も見られるなどのメリットはあったと思うが、やはり対面授業のように学生の反応が目に見えない点や、強調したり繰り返して確認できないもどかしさはあった。
③評価について。本来なら認定ベビーシッターの資格取得のための筆記試験を行い、6割以上を合格とするという形式で行ってきたが、今回はレポートで行うという異例の事態になり、レポート課題に工夫が必要になった。毎回の課題にも工夫をして5択の問題を入れたりした。フィードバックをまめに行い、正確な知識を持てるように留意した。
その結果、実習もあり大変な中、全員が合格したので良かった。

小泉 左江子:乳児保育Ⅱ

この授業は1年生の科目のため、今回の遠隔授業の影響を大きく受けてしまった。後期になり対面授業で初めて大学に来た学生たちは、大学の環境にも人間関係にも慣れない中での授業は、かなり緊張するものであったと思われる。しかし対面授業は4回に1回であり、その間2週間の実習があり、手探り状態の中での遠隔授業は不安が多くチャットが多かったのもうなずける。遠隔授業のネット環境が不安定な学生から届いていますか？という問い合わせも多くあった。また講師の方も不慣れなためteamsやformsを十分に使いこなせず、学生に迷惑をかけてしまった反省もある。その中で一生懸命課題に取り組んだ学生のなかには、自分のペースで学習できてよかったという感想を書いてきた人もいた。勉強の仕方や課題の書き方など基本的なことを学ぶ時間がなく一年間を過ごしてきた学生には今後丁寧な対応が必要だと思う。

後藤 悌二:障害児保育

当授業では学生の受信環境を鑑み、パワーポイント教材(スライド展開による授業進行と課題の提示)とレジュメの配布(ワード文書・図表による補助資料)により、授業を行ってきました。
不十分となってしまった点としては、グループ討議や体験的な内容(例、視覚障害体験、車いす体験)、講師の実務経験での事例や体験の紹介があると思います。
遠隔授業の基本的な内容としては、パワーポイント教材の質が問われたかと思います。言語的な読解力の乏しいといわれている現代の学生にどう伝えるか、文字だけでなく視覚的に、イラストなどを使用して動的に伝える工夫も必要かと思います。そうした工夫がなされれば、繰り返し教材を確認できる遠隔授業は利点もあったと思います。

白山 智文:音楽表現A

オンタイム、オンデマンド共通の遠隔授業の課題として、オンタイムでは映像を上手く用いたとしても、直接身振り・手振りを交えた対面授業のようにうまく伝わらない。このような部分を論理的に説明することが必要であり、はじめは慣れなかったが徐々にできるようになった。会話をすることも双方向同時に話すと聞き取れないこと、あうんの呼吸に頼ることができないこと、曖昧さがあると伝わりづらいことなどがあり、考えを整理しながら話す訓練になった。オンデマンドは繰返し見ることができるなどメリットも大きく、上記のような問題が起きないようにあらかじめ準備するので労力は大きいが有効である。

2つ目の課題として学習意欲・姿勢の維持があげられ、他大学での取組みとして、生徒にオンライン授業であっても通学時同様の服装や準備などをして授業に臨むよう促す試みがあった。通学不要という利便性の反面、気持ちの切替えがしづらいため、教員はもちろんのこと、生徒にもこのような工夫を促すことにはメリットがあったのではないかと思う。

最低限の資料・楽譜等については印刷しておいてもらうのがベストであり、授業の際に促していきたい部分だが、個々人で環境が異なるため可能な範囲でお願いするしかなかった。

最後にオンライン映像については、ピアノレッスンで手元を映すなどの工夫が必要であったが、同時に顔を映すことは難しく、また強要できないのでコミュニケーションとして不完全な印象が少し残った。Teams 資料投稿やチャット機能などを用いた連絡など便利な機能は今後も活用させていただけると授業に役立つと思う。

鄒 敏俐:外国語コミュニケーション(中国語)

授業の仕方が全く変わったので、経験を積んで、日々の反省が必要です。分かりやすい授業をするために資料作りがもっと工夫する必要があると思う。学生の全体レベルを把握しにくいですが、ネット上に授業資料をアップして、課題を出して、学生はいつでも見られて、学習できるようになることは自学能力を育てられると思う。

高橋 能樹:社会的養護Ⅱ

本学の授業の多くがそうであったと耳にしているが、リアルタイムでの講義は行わずに、学生が都合のよいときに、ウェブ上の講義のレジュメや資料を見る形態で講義が行われたようである。私は当初から、言葉だからこそ伝えられること(資料を見るだけでは伝わらないことや、そもそも、学生がきちんと読み込んだかどうかの確認も得られないこと)や、リアルタイムだからこそ得られるものがあると感じていたため、講義はすべて「リアルタイム型」で行った。

それに加えて、オンライン講義であっても、臨場感ある講義を行うとともに、参加意識を持ってもらえるように試行錯誤する中で、ホワイトボードの活用等も行ったところである。しかし、学生側のインターネット環境(端末がパソコンではなく携帯電話であったり、データ通信量の制約等)もあってか、アンケートの中では、資料が見ずらかったという声が複数あった。これについては、「経済格差」による学習の習熟度解消の点からも、大学側で、パソコンを貸し出す等の支援を検討していただけるとありがたい。

さらに言うならば、初回の講義の中で、学生には「主体的に学ぶ」ことを求め、「自調自考」、自ら調べて自分で考える姿勢で受講するように強調させていただいている。つまり、資料等についても、出典を伝えるので、必要に応じて自分で資料に当たるように求めたのであるが、アンケート結果を見る限り、私の意図は十分には伝わらなかったようである。

また、講義する立場から言わせてもらえば、学生の顔も見えない、声も聞こえない画面に向かって、1人でしゃべっている状態であり、これでは私自身も授業をしているという実感が持ちにくかった。参加意識(リアクションにつながる)という面では、拍手や挙手などアイコンで感情や反応を表現することができるツールがあるということなので、導入について検討してみたいと思う。リアクションしてくれることで、講義への理解度もわかる効果が期待できるのではないかと感じる。

最後に報告という意味で記述させていただいたが、たまたまマイクがオンになっていたのか、ひとりの学生が講義の終盤に「こいつ、まだ話しているよ」という趣旨の発言があった。この時だけなのか、この学生だけなのかは不明であるが、どれだけ真剣に受講しているのか、不安を感じる出来事であった。

永田 陽子:環境領域指導法演習

- ・遠隔授業は学生の表情などがつかみづらいので、戸惑う場面もあったが、意見を求めると殆どの学生が真剣に返答してくれ、それを受けての意見も述べられたので非常に良かった。
- ・毎回授業最後に感想や簡単な課題に答えてもらったので、学生の授業内容理解度をある程度掴めたため、次の授業に生かすことができた
- ・チャットのやり取りもスムーズにできた。
- ・今年度は4回に1回の対面があったため、それが遠隔授業にいかせてよかった。

能渡 綾菜:教育相談の基礎と方法

遠隔授業の回では、パワーポイントに音声を入れたものを動画としてアップロードしていた。書籍を映した状態で解説を加えるような形態に比べると、パワーポイントとしてまとめる方が負担は大きくなると感じる。しかし、アンケートでは、「パワーポイントにまとめられていてわかりやすかった」、「資料が見やすかった」といったコメントがいくつか寄せられた。このことから、パワーポイントのように視線誘導がしやすいツールを用いることによって、学生が集中して取り組みやすい授業を展開することができると考えられる。

また、遠隔授業ではFormsを用いた小テストを数回実施した。小テスト回答時の様子を見ることができないため、学生同士が相談しながら小テストに取り組めるという問題も起こり得る。そのため、初めから授業資料を見ながら回答する小テストとして設定した。資料の複数個所に目を通さなくては解けない問題にしたため、点数の分散は大きかったが、多くの学生が意欲的に取り組んでいたと感じた。

馬場 康宏:課題研究A

今学期は11回の遠隔授業と4回の対面授業の混合で行われた。

遠隔授業は、Microsoft Teamsの授業チームにより、「投稿」による指示・連絡、必要に応じてビデオ会議システムを用いた全体授業を行った。また、グループごとにチャンネルを作り、その中でグループ内の活動が行え、その状況を科目担当者が確認できるようにすすめた。

研究レポートのテーマ設定をして、レポート作成に取り組む授業であるが、通常対面授業に比べ、目の前で全体状況が把握しにくい点、その場の状況に応じて適宜助言をしたり資料提供等の援助が速やかに行いにくい点が今後の課題である。

馬場 康宏:青年心理学

今学期は11回の遠隔授業と4回の対面授業の混合で行われた。

遠隔授業は、Microsoft Teamsの授業チームにより、基本的にはリアルタイム・双方向型で行い、授業内容によっては教材・資料配布型も併用して行った。

リアルタイム・双方向型ではビデオ会議システムを用いて、通常の対面授業と同様に板書、図表、論文等の資料を画面共有による提示、「ファイル」により配布しながら講義を進めた。

問5(良かった点)として、一人ひとりの意見を述べる機会を与えたり、リアルタイム・双方向の講義であったことが自身で考えメモをとることで内容理解が深まったとの記述があり、少人数であったことと対面授業に近い授業で進めたことが学習成果の達成に活かされたと考える。

馬場 康宏:青年心理学

今学期は11回の遠隔授業と4回の対面授業の混合で行われた。

遠隔授業は、Microsoft Teamsの授業チームによる教材・資料配布型で行った。対面授業の回では、保育実践の映像教材を視聴して解説をし、課題に取り組む内容をまとめて展開した。

教材・資料配布型では、毎回パワーポイントによる資料提示を行い、各回の授業内容に関連する、もしくは内容理解を確認する課題を割り当て、授業日当日中の提出を求めた。

遠隔授業の場合、学生からの課題提出がデータで送信されるため、記述内容を分類・整理して他の授業回で紹介・講評する作業が容易であった。また、学生も他学生の意見に触れることで刺激を受け、視野が広がったり学びが深まったと捉えている学生もいることから、一人ひとりの学びをさらに全体の学びに繋げる授業展開が行いやすかったといえる。

また、対面授業週に遠隔受講許可が認められている学生に対しては、専用のチャンネルを作って指示や対応をしたが、このことについて学びやすかったとの自由記述もあった。

一方、問6(改善してほしい点)では、遠隔授業に対しての記述であると考えられるが、文字が多くて大変だった、文章が長いと理解が難しい、課題が難しいといった記述も3件あった。質問等については、少なくとも定められた授業時間中は即応できるようあらかじめ伝えて応じていた。特に遠隔授業の場合、周囲に他学生がいないことによる質問のしやすさはあったと感じている。一方、対面授業とは異なり、周りの友人に容易に質問・確認等がしにくい状況でもあり、科目担当者に自ら質問をしたり援助を求められない学生に対する対応が難しいと感じる。

林 直美:教職概論

オンライン、オンデマンドなど様々な授業形態を試み、そのたびに学生に意見を聞きながら一番望ましい遠隔授業を模索し続けた1年でした。その結果、最後はオンラインで授業を実施する方法が多くなりましたが、そのことにより突然のトラブルもあり、アンケートにもネットトラブルに関することを指摘する記述が見受けられました。少しでも状況をよくするために自宅の回線を光回線に変えたり、ネット環境が安定している本務校の研究室から授業を行ったりするなど、いくつかの改善策を試みました。最も問題なく授業が行えたのは本務校の研究室から実施した時でした。個人的には非常勤講師の場合、自宅のネットやパソコンの急なトラブルが生じた時に出勤してオンライン授業ができる場所などを設けていただけたら大変有難いと感じました。

福山 多江子:課題研究A

遠隔授業の課題は、実践を行うにあたりその作品を作成することは自分のペースで自宅にて行えるため容易であるが、実践的な部分を行うにはなかなか困難な点があると考えられる。また、作品を作成する教材も学生自身で負担するものが多数あり、金銭的な負担にもつながる点も問題点であると考えられる。対策としては、初回授業時に作成したい作品と教材を用紙に記入させ、学校で準備できるものは翌週までに準備し、個人で購入するものは学生自身で購入する用意させる。対面で授業を行う際にはそれでよいが、オンラインの場合では郵送などで学生に教材を送るようにすることで遠隔授業にも対応できるであろう。

また、実践力・即応力に関しては遠隔のリアルタイム授業にてそれぞれ発表日を学生に決めさせ、画面の中で発表させ、学生同士でその実践したものについて討論を行い、よりよい演じ方を研究する形式をとるようにすることが改善につながるであると考えられる。

福山 多江子:教職実践演習(幼稚園・保育所)

対策としては、資料をできるだけ見やすく、理解しやすいものにするということが重要であるため、それを心掛けたため、オンラインの授業であってもわかりやすかったという意見が多かった。

また、オンラインの授業であっても決められた時間の中で出欠席をとり、時間がかかるもの以外はその時間内に課題提出ができるようなものにしたため、授業を受けている時間に入り学べたので、普段通りに授業を行うことができよかったと思う。という意見があった。このことに関しては成果として挙げられるのではないと思う。

また、改善点としてはフィードバックを行わなければならないような問いかけを行った場合には、その回答を行うようにしていかなければならないことが改善点になると考える。そのフィードバックを行うやり方として、その回に資料を作成した先生が、次の会の最初のPPTの場所で、前回の授業の振り返りという場所を作成し、前回に関するフィードバックを理解しやすい資料で提供するということが必要になるということを改善していかなければならないと考える

福山 多江子:教育実習指導

このことに関しては、まず前期に授業を行って課題として挙げられたのは、課題の量ということが一番であった。科目は違うが、課題量に関してはどの科目においても配慮しなければならない点であるため、なるべくその授業時間内に提出できるか大都市、その時間内に完了できない課題に関しては、十分に時間をとり、課題ができる配慮をした。このことによって課題量に関しては前期の授業のような課題量が非常に多いという自由記述はなかった。自分のペースで課題をこなすことができたというコメントが多数を占めていたため、この点は改善できた点であると考えられる。

また、資料提供に関しては、できるだけ理解しやすいように丁寧に詳細を記述した。文字のみでなく、絵や事例などを用いて読みやすいように工夫し見る意欲がわくような資料を学生に提供するように心がけた。それにより、学生からの声は、資料が読みやすかった、PPTに沿って授業が行われていたのだから後から内容を振り返ることができてよかった、資料が多かったため、実習に行くときも役立った、チャットで質問してもすぐに対応してくれ、とても安心できた、将来、生かすことのできる学びが多かった、など、工夫した点が生かされたコメントが多かった。

対面授業と、オンラインの授業でのやり方に変化を持たせ、対面時にはその授業時にしかできない不思議な折り紙の折り方、紙芝居、絵本の読み方の実践や教材の配布などを行い、工夫をした。

このような点において前期の学生アンケートを参考にし、改善し、成果があったと考えられる。

藤川 志つ子:障害児保育

基本的にリアルタイムで実施したが、学生の集中力を担保するために途中でチャットで返信する課題を数回求めた、またppt画面での講義の他、YouTube動画を視聴したり、キーワード検索を課し自ら学ぶ工夫をしたが、やはり学生の学び意欲については個人差が大きく、全員に対して保障できたかという点については、課題が残った。また、提出課題へのフィードバックは翌週までの済ませた。時間のかかる作業ではあったが、学生には好評であった。その他、個々人の考えを課題やチャットを通して、リアルタイムでやり取りできるという点は、なかなか発言が出来ない学生に対しては、遠隔授業のメリットであると感じられた。

藤村 秀子:音楽領域指導法演習

できる限り対面授業に近づけることを念頭に授業を行ってきたが、学生全員の顔を確認することはできないため、もどかし思いを何度も感じた。カメラをonlにして参加することを周知したのなら、表情などを確認できる、そして学生同士認識することができると思われるため、来年度の授業ではカメラをonlにして授業を行いたいと強く感じた。また、90分の授業をずっと聴くだけというのは、学生の集中力が持たないと感じたため、授業はじめに当日の授業内容とを提示し、授業内で課題を行う時間を設けたり、ブレイクタイムとして休憩時間を入れる、グループ活動を行い、発表を行う、また、楽器製作を盛り込み、授業内に製作、画像を提出させるなど、学生が授業に参加していることを意識できる様な内容を取り入れたところ、学生には思ったよりも好評だったようなので、今後も取り入れて行こうと思う。最後に、今後の課題として、楽器を演奏する、合唱をするなどの保育現場に必要な内容ではあるが、事実上難しいので、可能であればシンクルーム等のソフトを使用できたらと思われるが、学生側に負担がかかる事を考えるとやはり難しいのかと考える。他の方法を音楽の先生方連携して、模索していきたい。

堀内 秀雄:課題研究A

課題研究A(ゼミ)での期待される活動としては、ゼミ内での討論、プレゼン、共同活動などが上げられるが、遠隔授業ではそこが難しく、どのような方法で、ゼミの仲間と繋がることができるか、様々な試み、改善を行った。具体的には、teams授業内に学生各自が発表用ファイルアップすることができること、またゼミ活動の内容に応じた別チャンネルを設定し、親睦をテーマにした会話ステージを準備したこと、各自の研究とオンライン個別面談とを併用し、学習時間と個別指導を確実に確保したなどである。このことは、学生の授業アンケート自由記述の中で十分な評価を得ることができたが、本来の目的である「課題研究の理解と個別テーマ設定」については、アンケート実施段階では、到達できている学生とそうでない学生とがあり、最終的な学習成果評価については、4.5という数字となっている。遠隔授業では、毎回その授業の目的は何で、そのためにその授業回で何を行うか、授業資料を注視することとなり、教員学生ともにある意味到達目標を十分意識化した授業が可能であるといえ、最終レポートでは、例年以上の内容の成果を確認することができた。

堀内 秀雄:教職実践演習(幼稚園・保育所)

本年度の2年生後期教職実践演習では、途中施設実習となる学生も多く、時間割通に授業を受講することができないケースが少なからずあった。この場合、授業時間外、また実習終了後に各自ネット配信された授業資料を見て、課題の演習ノート記入を行うわけだが、ある意味完全な自習となり、本人の意識・態度、これまでの学習成果の状況に応じて、演習ノートの書き方も大きく異なってくる。今回は実習等様々な理由で時間割通りの教職実践演習の受講が難しかった学生に対して、提出期限をそれぞれ別に設けるなど、個々の事情に配慮しながら課題の提出を保証するシステムを心がけた。また、4週に1週の対面授業回には、直接個別に話をしながら、課題実施状況の共有を行い、確実に課題成果を得ていくことを目指し指導をおこなった。結果最終的な学習成果物として全て演習ノートが提出され、学習成果の確認を行うことができた。

堀内 秀雄:造形表現A

遠隔授業での実技としては初めての経験で、学生教員とも何がどこまでできるか、手探りの状態だった。実技の特性とは、実際に自分の手で体験しながら結果を産んでいく、このことを強く意識させるには、できるだけリアルタイムに学生と繋がることが大切と考え、毎回声かけをして点呼を行い、授業中には必ず全員と繋がり会話をする形を心がけた。学生からの授業アンケートの自由記述には、これを評価するものが大変多く、丁寧な一人一人との繋がりを重視した授業形態は効果があったものと思う。教員との繋がりは一定つくれても、学生同士作品を眺め合うことが難しく学生からは「他の人の作品が見えず、不安だった」や「一人で作っているのが悲しかったみんなとやったらもっと楽しい」などの声が寄せられた。実技では実際に実物を見ることのメリットがあると考えていたが、遠隔授業中ならではの説明パワポ、動画、画像も学生にとっては、自分のペースが作れるというメリットがあり、対面授業でも積極的に遠隔授業方法を取り入れていくことも効果的だと、学生のコメントから読み取れた。

松本 純子:課題研究A

13名であったため、オンラインでも3～4名のグループに分けて会議形式で意見交換することがスムーズにできた。教員も必ず全てのグループの討議に部分的でも参加することができ、その場でアドバイスしたり資料提示をしたりできたことが学生の満足感に繋がったと想われる。

しかし、絵本を読み聞かせる際に絵本が画面にうまく映り込まなかったり、途中で回線の具合が悪くなり声が途切れたりすることもあり、不自由な思いをさせた。特に、スマホで受講している学生がやりにくそうであったため、今後機器の貸し出しなどの対策を一層進められるとよいと考える。

松本 純子:教職実践演習(幼稚園・保育所)

授業開始後に毎回出欠確認を行っていたが、「確認ファイルを送り損ねた」「忘れた」という問い合わせが最後の講義まで複数件あり、授業開始時に画面で顔を見て確認するなど出席確認の方法を工夫する必要性を感じた。演習授業ではあるが、学年統一授業でもあり、オンラインで友達と意見交換したり協働したりする演習内容を組むことが難しかった。

松本 純子:保育内容総論

学生が説明を聞かなくても見て理解できる資料作りを心がけ、教科書のページ数を明記して運動できるようにした。多くの学生は、この方法で例年以上に教科書をよく読むようになり、活用できたという声が聞かれた。文書による説明しかできないために、重要なところ、ポイントを色分けするなどして表記したが、「重要なところが多すぎて全部を理解できなかった」という声もあり、講義を進める中ではこうした学生の声が聞かれなかったため、改善できなかったことが悔やまれる。

演習授業であるため、グループ演習の時間を毎回設けたが、1クラス11グループになり、教員が毎回全てのグループの様子を詳細に見て指導することができなかった。

矢澤 由紀:情報機器の操作

遠隔授業は教材・資料配布型で行った。問5の自由記述欄(良かった点)では、授業資料が分かりやすかったと概ね好評であったが、問6の自由記述欄(改善してほしい点)では、分かり難かったという意見もあった。授業計画では、パソコンを使用した文書作成などの実習を毎回行う予定であったが、初回授業でパソコンの有無についてアンケートを行ったところ、パソコンを持っていないと回答した受講生は、全体の約15%だった。その為、パソコンを持っていない受講生にも配慮した実習(課題)に変更する必要がある。授業資料では図や説明文を例年より増やし、パソコンの操作手順を中心として、スマートフォンでの操作手順も併記した。受講生から質問が多く寄せられた箇所を中心に、今後も説明文等の見直しを行っていく。動画による授業資料の作成も検討したい。対面授業における主な課題は、授業の進行速度と、実習中に複数の受講生から同時に質問があった場合にすぐに対応できないことであったが、遠隔授業ではこの2点が大きく改善された。しかし、問6には、課題が難しかった(できなかった)という回答もあり、質問や相談がしやすい環境を更に整えていく必要がある。

安見克夫:課題研究A 教職実践演習(幼稚園・保育所) 言葉領域指導法演習

遠隔授業のオンデマンド資料配付型では、教員と学生の双方向の心的環境を軸に、講義計画を立案する必要がある。教場と異なり、学生の受講する態度や心的状況を読み取ることが難しく、学生の課題提出物や、チャットなどでの、やりとりから推測することしかできない。時には、リアルタイムでの遠隔対面を実施する場合においても、自分自身や室内を公開することにためらいがあるなど、リアルタイムでの心的配慮も重要な課題となる。遠隔授業は学び手が主体とする大学教育本来のあり方に近い学びであり、対面であれ、遠隔であれ、特に問題視する点はないが、学生一人一人との指導的観点からは、再考する必要がある。

今回の遠隔授業の問題点は、学生の置かれた立場を軽視し、15回の授業実施を完全化しようとしたことである。毎日が、学生にとっては、出席の代わりに課題の提出や演習製作物の提出が、期限付きで提出させられたことで、対面授業以上に負担がかかっていたことが理解できる。こうした進め方は学生にとって、数科目の課題提出が数日遅れた場合、かなりの重圧となり、精神的に追い込まれる結果となる。成果としては、資料配付型は、いつでも資料を読み返すことができることから、学びの深さは、十分にあったと考えられる。学生にとっては、文章力の学びにつながり、成果はあったとのことであるが、出席確認と課題提出との関連性を再考する必要があると考えている。出席を重視するのか、毎回の課題提出を重視するのかである。学びの時間を十分に保障し、資料を読み込み、課題を提出できるようにしていくことが重要であると考えている。なぜなら、出席回数が問題ではなく、どのくらい何を学んだかを測定する事こそ学生の成果となるからである。

山下 祐加:音楽表現A

前期に引き続き、ピアノの練習時間をしっかりとっている学生が多かったように思います。試験でも一曲一曲の完成度が高く、日頃から一生懸命取り組んでいる様子がみられました。オンラインのため、授業日以外のメールやチャットでの質問等も受け付けやすかったかと思います。学生からも先生と一対一でピアノレッスンを行っているため、他人に気がねすることなく自分のペースでできるということや、質問がしやすかったという声もきかれました。また、対面になった際も、一対一のピアノレッスンが良いというコメントも多く書かれていました。オンラインでの授業は私もはじめてでしたので、他の先生方との話し合いを重ねながらの授業づくりになりました。オンラインでもこれまでと同じ、もしくはそれ以上に学生が成果を感じられる、達成できるにはどのようなしたらよいか、私自身も試行錯誤の連続でした。今までとは違う気付きや学びが、私自身にもあったと思います。最後に、今までほとんど会ったことがない学生同士が、後期の対面授業でのアンサンブルを通してすぐに打ち解けていったことは、学生のコミュニケーション能力や感性、そして音楽の力だと思いますので、それを活かす授業づくりをすることがとても大切だと感じました。

吉田 博行:課題研究A

オンラインでは、リアルタイム(テレビ会議)でおこない、学生個々の意見や考えを伝えやすく改善した。または、質問をうけたり、適宜必要に応じて個別に指導した。学生にとって、論文についての基礎的な学習につながったと考える。

吉田 博行:教職実践演習(幼稚園・保育所)

課題の提出においては、学生からの返信に時間を必要とした。学生によっては、各科目他の課題提出が集中していたことも要因の1つと思われる。課題の提出は、演習ノートを書き写して送信とした。これによって、学習結果がすみやかに確認された。

吉田 博行:社会的養護Ⅰ

本科目では、課題の提供は極力少なめにし、学習する心を育成したいと考えた。学生によっては、不足に感じられた方もみられるが、課題を多くすると逆に、不満や困難になる傾向が想定された。また、オンラインの場合、出席の確認についても、チャック忘れや時間の遅れなどがみられ、その都度個別対応を必要とした。

淀川 裕美:乳幼児心理

初回のアンケート結果をふまえ、また初めての遠隔授業ということもあり、対面以外の授業は全回オンデマンド形式としたが、それゆえ授業でのライブな学びの面白さや、対話する経験を十分に確保できなかった。また、質問等も直接受け付けることができず、即興的な学び合いを生み出せなかった。来年度は、オンデマンド形式ではなく同時双方向型の授業を実施することで、授業への参加態度や意欲を高めるように工夫する。また、技術的な問題として、Microsoft TeamsとMicrosoft Formsの使い方について、うまく活用しきれずに、受講生から少し不便だったという声があったため、その点について改善を行う。

渡邊 晶:課題研究A

遠隔授業と対面授業の併用の課題としては、その対策として、遠隔授業ではなかなか伝わりづらいという事を踏まえ、対面授業の際にできる限りの事を学生に伝えるように事前に準備し指導した。

渡邊 晶:教職実践演習(幼稚園・保育所)

遠隔授業で使用するteamsの使い方や機能を教員自身が完璧に把握していなかったため、学生自身に迷惑をかけてしまったことがあった。学生自身も不慣れな学生も多く、「課題をteamsに提出した、してない」で揉めることもあり困った。teamsの使い方はマニュアルでも丁寧に解説してくださっているが、不慣れな教員や学生のために講習会の機会を作ってくださると改善できるきがする。

渡邊 晶:保育カリキュラム論

やはり、学生とのコミュニケーションが十分できないことが課題である。対面授業の際にはできる限り多くの学生とコミュニケーションを取り、課題未提出の学生に今後の対策を伝え、teams内でも多くの質問に対応したが、限界を感じた。teamsでは、授業で伝えたいことが十分に伝わっていたかどうか、というのが最後まで不明であったが、アンケート結果を見る限りではある程度の成果が出ていたように感じている。

渡邊 晶:保育者論

実践的な授業内容なので、それをどのように遠隔授業で解説していくかが大きな課題であった。その対策として、実践的な内容を学生自身に考えさせる課題を毎週提示する授業展開を行った。成果としては、多くの学生が「専門知識を習得・向上できた」と回答するに至った。

【4】 アンケート結果の分析と評価

本アンケートは、全科目、全教員での実施を基本としている。2020年度のアンケート対象者（履修者数）は、10,336名（前期・後期）であった。うち回答者数は、5,425名で、回答率は、52.4%であった。

本学における該当科目、該当教員のすべてにおいてアンケートを実施した。本年はWEBアンケートとして、学生による回答は、ネットを通じて学外の委託業者に送られ、集計が行われた後、企画・IR室を経由して担当教員に科目単位で結果が通知された。

なお、同一科目を複数教員が担当した場合は、担当者単位で集計・通知を行い、コメントも依頼した。

① 科目開設時期による分析

2020年度のアンケートの東京成徳短期大学幼児教育科全体の科目開設（アンケート実施）時期による結果（平均値）は、下表のとおりである。

なお、参考として（ ）内には2019年度の平均値を示す。

	質 問 内 容	前 期	後期(通年科目を含む)
問1	授業目的の理解	4.54% (4.36%)	4.59% (4.38%)
問2	授業姿勢	4.57% (4.32%)	4.58% (4.32%)
問3	授業内容の理解	4.31% (4.23%)	4.41% (4.28%)
問4	修得・向上できたもの(教育目標、カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーに対する回答)	次の表のとおり	
問5・6	自由記述	各科目で集約	
問7	学修成果	4.31% (4.27%)	4.39% (4.28%)
問8	選択・自由設定質問	各科目で集約	

問1「授業目的の理解」では、高値を示し、授業目的の理解は達成できていると考えられる。

問2「授業姿勢」についても、同様に高値を示し、学生は授業に真剣に取り組んだと評価できる。

問3「授業内容の理解」についても、前年度比、増加傾向であり、高い評価と考えられる。

問4「修得・向上できたと思われるもの(教育目標及びカリキュラムポリシー・ディプロマポリシーに対する回答)」の結果は以下のとおりであった。

なお、参考として（ ）内には2019年度の平均値を示す。

修得・向上できたもの	前期	後期(通年科目を含む)
ア：教養・美しい心	30.5% (27.5%)	33.3% (24.3%)
イ：専門知識・技術	67.7% (66.3%)	72.2% (64.6%)
ウ：得意分野の知識・技能	22.5% (19.1%)	31.5% (21.2%)
エ：研究意欲	33.1% (25.6%)	33.6% (24.3%)
オ：実践力・即応力	42.5% (32.4%)	47.3% (34.5%)
カ：社会的責任感・倫理観	36.9% (26.8%)	33.7% (25.1%)
キ：保育者理解・行動力	42.1% (30.2%)	41.2% (28.0%)

この数値は、分子をア～キそれぞれの選択回答数、分母を全回答者数として得られたものである。ア～キは、すべて教育目標・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーから抽出された本学幼児教育科の柱となる項目である。学生には、学習目標ア～キの中から2個以上選択を求めた。

結果、すべての項目で、前期、後期と比較して、増加傾向がみられた。うち、「専門知識・技術」については、前期 67.7 %、後期 72.2%と他項目と比較し高い値を示した。よって、多くの学生が専門知識・技術の修得を実感していると考えられる。

次いで「実践力・即応力」及び「保育者理解・行動力」についても、増加傾向を示し、高値を示した。

問5・6は、自由記述とした。

問5は、「オンライン授業・資料・対応などで良かった点」、問6は、「オンライン授業・資料配布・対応などで改善してほしい点」とした。各授業に対する具体的な学生の自由記述を報告し、今後の授業改善に活用できるよう各授業担当者へ報告した。

オンライン授業は、今年度初めての取り組みであり、学生及び教員双方にとっても戸惑いがあり、授業への取り組みや方法に苦慮した。今後のより良い授業に向けて、授業のあり方を考える機会となった。

具体的内容は、各教員のアンケート結果のコメント、授業改善を参照していただきたい。

問7「この授業を履修し、その分野での考え方や知識、技能が身につきましたか（学修成果）」は、この授業アンケートで最も重視したい項目である。問7については、前期は、4.31%（前年度：4.27%）、後期は、4.39%（前年度：4.28%）であった。

問 8 は、選択・自由設定質問とした。各授業担当者が自身の授業効果として確認したい項目を独自の視点から設定していく質問であり、各教員の授業に込めた理念が現れる部分であり、教員それぞれが質問を設定することとした。担当者が授業を通して何を最も伝え、授業を受けた学生に評価して欲しいと考えているのか、教授ポリシーが現れる部分でもある。問 8 の具体的内容は、教員コメントの中でその結果と活用を参照いただきたい。

学修成果を学生自身がどう感じているかは、授業評価を通して教育開発研究を行う上で、最も大切なポイントであると考え。本学の「授業アンケート ―より良い授業を目指して―」は、こうした視点から、学修成果を高めるために工夫を重ねてきた成果である。

2020 年度の授業アンケートは、結果の集計に際して、学修成果が特に高い(5) グループ、高い(4)グループ、学修成果が比較的低い(3・2・1) のグループに分けて、問 1・2・3・8 の得点をクロス集計して示した。実効性に関しては、各教員のコメントを参照いただきたい。

② 科目種別による分析

2020 年度 授業アンケート―より良い授業を目指して、では必修科目、卒業必修科目、選択科目について集計した。

必修科目の履修者数は、1,102 名、回答者は 589 名で、回答率は 53.4%であった。

卒業選択必修科目の履修者は、1,067 名、回答者は、650 名で、回答率は 60.9%であった。

選択科目の履修者数は、8,167 名、回答者 4,186 名で、回答率は 51.2%であった。

アンケート結果は、下表のとおりであった。

なお、() 内には 2019 年度の値を示す。

	質問内容	必修科目	卒業選択必修科目	選択科目
問 1	授業目的の理解	4.53% (4.38%)	4.53% (4.33%)	4.57% (4.37%)
問 2	授業姿勢	4.56% (4.36%)	4.52% (4.29%)	4.59% (4.32%)
問 3	授業内容の理解	4.37% (4.26%)	4.33% (4.24%)	4.34% (4.25%)
問 4	修得・向上できたもの (教育目標、カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーに対する回答)	次表のとおり		
問 5・6	自由記述	各科目で集約		
問 7	学修成果	4.34% (4.28%)	4.28% (4.27%)	4.35% (4.28%)
問 8	設定質問なし			

問１から問７の全般にわたり、平均値は、高値を示した。

幼児教育科の学生のほとんどが保育者を目指しており、どの授業も大事な科目として取り組んでいることと考えられる。

問４「修得・向上できたと思われるもの(教育目標及びカリキュラムポリシー・ディプロマポリシーに対する回答)」に関する結果は、以下のとおりであった。

なお、() は、2019 年度の平均値を示す。

修得・向上できたもの	必修科目	卒業選択必修科目	選択科目
ア：教養・美しい心	35.3% (30.6%)	39.8% (30.9%)	31.5% (24.5%)
イ：専門知識・技術	70.8% (59.4%)	54.6% (53.3%)	77.0% (68.2%)
ウ：得意分野の知識・技能	31.2% (16.9%)	38.5% (31.0%)	25.2% (18.9%)
エ：研究意欲	51.8% (39.3%)	17.5% (19.5%)	35.9% (23.8%)
オ：実践力・即応力	36.3% (27.7%)	44.8% (32.7%)	48.5% (34.3%)
カ：社会的責任感・倫理観	34.1% (32.5%)	18.0% (18.8%)	41.7% (26.2%)
キ：保育者理解・行動力	34.3% (29.9%)	24.6% (21.0%)	48.4% (30.3%)

アの「教養・美しい心」の数値は、卒業選択必修、必修科目、選択科目卒業選択の順であった。値は前年度と比べ、向上した。卒業必修科目は「豊かな人間性と社会性を育てる」科目で、卒業選択必修科目は教養科目にあたる科目であり、科目種別設定の企図と結果との間にある程度の整合性が認められると考える。

イの「専門知識・技術」について、特に卒業選択科目に関して数値が高いことは、「保育の実践力と即応力を育てる」「確かな専門的知識と研究意欲を育てる(資質の高い専門家を養成するカリキュラム)」という科目種別設定の企図との間に整合性が認められると考える。

ウの「得意分野の知識・技能」に関しても、教養科目であるとともに「個々の学生の得意な分野を伸ばし、魅力のある保育者を育てる」という科目種別設定の企図に合致した結果であると考えられる。

エの「研究意欲」については、特に必修科目において高い数値が認められた。このことは、卒業必修科目とされる6科目の中に「課題研究A」「課題研究B」という研究実施とその成果発表・報告を重視する2つの科目が含まれ、それが卒業必修科目全体の3分の1にあたることによると考えられる。

オの「実践力・即応力」は科目種別設定の企図どおり、卒業選択科目において最大値、カの「社会的責任感・倫理観」も「豊かな人間性と社会性を育てる」科目である卒業必修科目で高値を示した。

キの「保育者理解・行動力」は、選択科目で高値を示した。教養科目という特性が反映されていると考えられる。

このように、学生が実感している学びの成果は、概ね、本学が企図した科目種別の特性と合致している。多くの項目の値は、前年度と比べ向上する傾向が確認されたが、今回オンラインを中心とした授業に対するWEBアンケートであることが、具体的にどのように結果に作用してきたかは、数字上では確認できない。おおむね昨年より評価の高い結果となっているが、WEBアンケートとなった関係だろうか回答率が大きく下回っている。つまり、比較的授業への関心が高い学生の回答結果が表れているとすると、今回の高い数字であることを全面的に評価することは難しい。しかし、問4の（習得・向上できたもの）について、最も高いものが「専門知識・技術」次いで「実践力・即応力」「保育者理解・行動力」の順であることは、本学幼児教育科の「学習成果」及び3ポリシーに合致した評価できる結果ではないだろうか。

なお、問5：自由記述（良かった点）・問6：自由記述（改善してほしい点）・問8：教員設定質問については、該当する科目の各教員のアンケート結果に対するコメント及び授業改善を参照していただきたい。

おわりに

「コロナ禍における新しい授業改善の取り組みに寄せて」

文部科学省は、高等教育各機関に自主的・自律的な質保証への取組を推進しています。各大学や短期大学が実施する教育改革の優れた取り組み「改革総合支援事業」に対して、文部科学省が支援するとともに、社会に情報提供を行い、質の高い大学教育改革を進めています。これからは、高等教育の国際化により、諸外国からの留学生などに対して日本の高等教育の質の高い基準が求められていることから、今までの国内競争での大学ではなく、グローバルな視野に立ち、ダイバシティを取り入れた教育の拡充が求められています。

そのため、短期大学では平成20年度から短期大学設置基準に義務化されたFD活動を通して、様々な取り組みがなされてきています。

本学では、全学的IR企画室が核となり、短期大学は学務部FD委員会によって、授業法の改善等が実施されています。特に学務部FD委員が力を入れている、「学生との懇談会」で、教員とクラス委員が対面する中の生きた意見交換は、大きな意味を持つ成果であると評価しています。

また、毎年実施されている「学生による授業アンケート」結果に対しての各教員からのコメントは、個人及び科目の学修成果を見直し、新たな授業改善への取り組みの機会となります。これらの成果は、短期大学認証評価機構での自己点検評価「授業効果・学修成果の査定」として検証評価されているところです。

2020年度は、誰もが予想することのできなかった新型コロナ感染の急速な拡大に伴い学校教育が全面的に停止し、本大学も、対面授業から急遽遠隔授業に対応し、前期のほとんどが遠隔授業となり、後期は4週に一週の対面授業を実施するなど、安全で効果的な教育の在り方を模索しながら、授業が進められました。

遠隔授業の動作環境も思うように整わない中、教員は、一人一人の学生に丁寧に対応しながら励まし、学修意欲を損なうことなく対応した年となりました。

2020年度の「学生による授業アンケート」の結果によると、ディプロマポリシーである「専門知識・技術」は、他の項目と比較した場合、「学習成果が上がった」と答えた割合が、前期、昨年度66.3%に対して今年は、遠隔授業にも関わらず67.7%と、1ポイントほど高くなっています。また後期は昨年度64.6%でしたが、今年度は72.2%とさらに高くなり、全体的には専門的意識や技能が身についたと回答した学生は7割を超える成果となりました。意外にも遠隔授業を中心としたハイブリット型授業でありながら、「授業目的」・「授業内容の理解」及び「授業姿勢」などは、前年度より高く、特に、「授業姿勢」が、前年度を大きく上回ったことは、学生ひとり一人が真面目に、真剣に取り組んでくれたことと、教員の授業改善と丁寧な学修指導の賜であった結果であると感謝すると共に心より御礼申し上げます。

その他については、FD委員会が結果について考察しているので参考にされ、今後の授業改善の一助にさせていただきたいと思います。

今回の学生によるアンケート結果については、各科目において様々な幅があり、それぞれの科目の特徴や授業形態等によって、その評価は異なると考えられます。

また、担当教員のコメントの中には、授業改善に対して、学生の学修に対するモチベーションを高める工夫や、学生自らが興味や関心の持てるアクティブラーニングの取り組みなど、授業者の授業改善が、年を追う毎に、工夫されていることが見られます。

今後に向けて、学生によるアンケート調査や教員同士の授業参観など、FDの取り組みを多重化していくことで、さらなる授業改善によって高い学修成果が得られることに期待したいと思います。本学の質の向上に向けて、総合的FD活動のアセスメントを行うと共に、教員一丸となって、授業改善に努めて頂きたいと思います。

東京成徳短期大学

幼児教育科長 安見克夫

索引

浅川 茂実	74
安部 久美	55
池田 三鈴	21,39,63,77,119,132
石川 雅俊	107
磯部 知愛	130
糸山 昌己	33,88,95,105,139
岩久 由香	136
岩崎 朋枝	142
大國 ゆきの	26,37,52,82,115,129
大澤 洋美	32,89,106,141
甲斐 聖子	36,91
片貝 晴夫	54,56
木田 マリ	143
北洞 誠一	120,133
金城 悟	70
郡司 敦	29,40,51,59,85,111,114
小泉 左江子	116,134
後藤 悌二	147
今野 浩子	44
白山 智丈	58,110
鄒 敏俐	140
杉本 亜鈴	24,41,80,102,123
高橋 能樹	137
武井 大輔	43,46
田中 浩二	27,61,83,100,144
土屋 朱帆	42,92
寺田 清美	22,73,78,97,125,135
永田 陽子	121
中山 恭一	45
那須野 三津子	68
能渡 綾菜	69,126
馬場 康宏	28,38,64,84,113,118
林 直美	47,104
福山 多江子	30,48,62,86,99,103
藤川 志つ子	146
藤村 秀子	67,124
堀内 秀雄	31,87,93,117
松本 純子	23,35,49,79,94,112
村上 葉月	72
森 眞理	60
矢澤 由紀	108
安見 克夫	20,66,76,96,122

索 引

山下 祐加	57,109
横山 文樹	127
吉田 博行	25,53,71,81,98,128
淀川 裕美	145
渡邊 晶	34,50,65,90,101,131,138